

PHOTO GRAPHICA

2010 AUTUMN VOL.20

[フォトグラフィカ]

現代写真の視点を遡る
写真表現の総合情報誌

特集

若手写真家大特集

ライアン・マッギンレイ

特集：ライアン・マッギンレイ

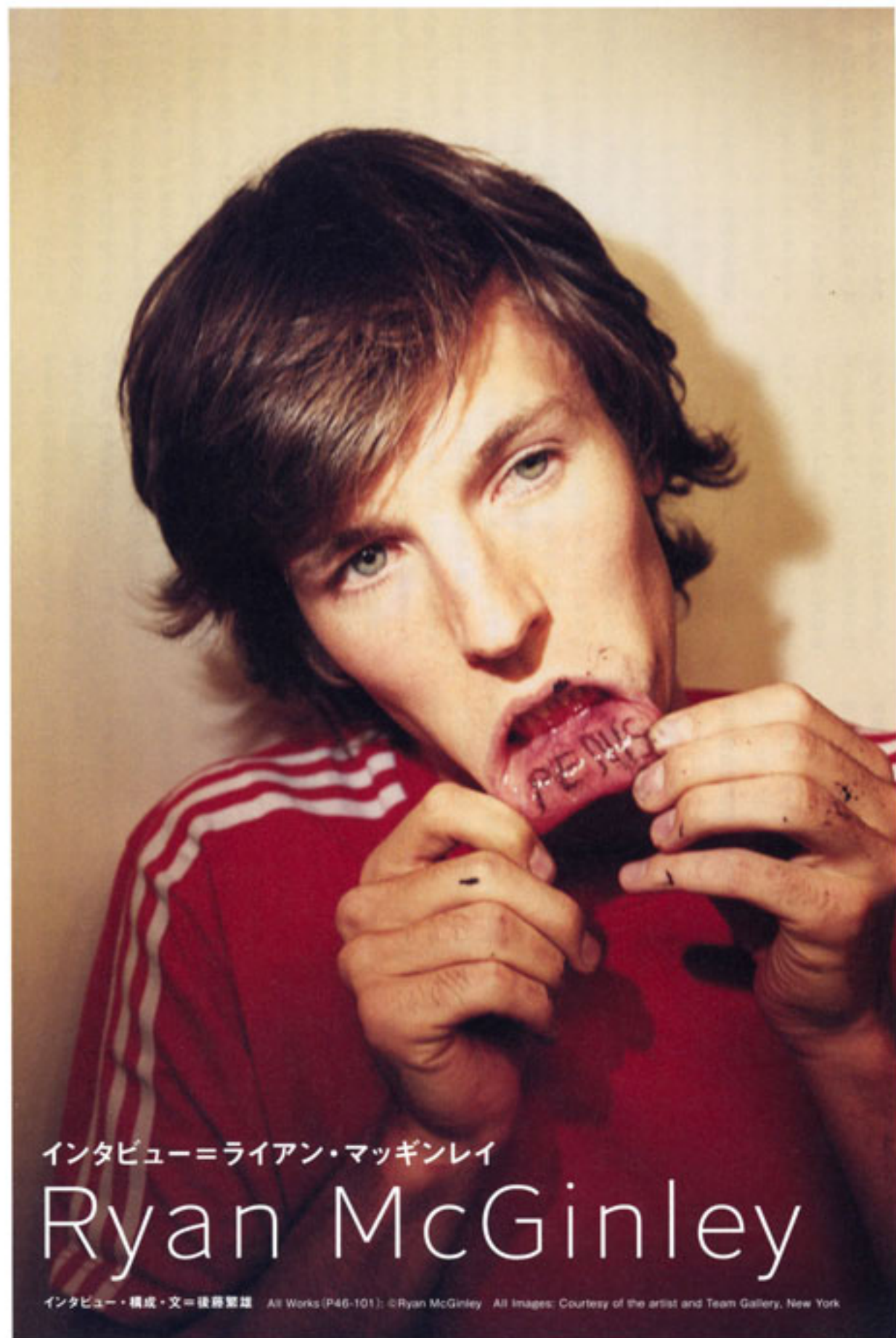
Ryan McGinley

次世代写真家の胎動 いま期待の若手作家たち

AOKI takamasa / 石井文得 / 川島小鳥 / 小山泰介 / 高木こずえ / 武田陽介 / 竹之内祐幸 / 多田ユウコ
遠山ゆう紀 / 中島大輔 / 中山正羅 / 西野壮平 / 原未来 / 細倉真弓 / 和田裕也 / 渡邊有紀
ウィリアム・エグルスト インタビュー

荒木経惟 連載「ARAKI GOROKU」センチメンタルな旅 春の旅
篠山紀信 連載「篠山紀信の現場 2010」AKB48+秋元康





インタビュー＝ライアン・マッギンレイ

Ryan McGinley

インタビュー・構成・文＝後藤繁雄 All Works (P46-101) ©Ryan McGinley All Images: Courtesy of the artist and Team Gallery, New York

スマートなピラニアたち

「アメリカの写真」という言い方自体、もはや意味がないかもしれないが、この数年、ロー・エスリッジやワリッド・ベシユティ、タリン・シモンなどが新たな動きを確実に生み出してはいるが、「スター」不在の感は否めなかった。デュッセルドルフ派、ジェフ・ウォール、ウォルフガング・ティルマンスたちが、コンテンポラリー・アートとしての写真の分野で大活躍をしていることを考えると、メイブルソープ、ナン・ゴールドフィン以降アメリカ写真の影響力は低下していると言っても言いすぎではないだろう。

しかし今年春、NYの「ゴッギョラリ」でのライアン・マッギンレイの個展はオープンングに2000人以上のオーディエンスが集まり、混乱のはてに消防車までかけつける騒ぎとなりニュースでも放送された。2002年、いきなりホイットニー美術館で個展を開いたときは、まだ「スケーターあがりの写真家」などと書かれていたライアン・マッギンレイのアート界での評価が、この数年うなぎ上りなのである。

僕がライアンに会ったのは、2006年のいまは無き雑誌「エスクアア日本版」の2007年1月号、ニューヨーク写真特集「写真が語る、ニューヨークの最新線」のときだった。その時、僕はロバート・フランクをインタビュすると

いう稀有なチャンスに恵まれ、そのポートレート写真をライアンに依頼した。ライアンは撮影当日、助手になんとタイニーパイプの編集者／キュレーターのティム・パーバーをひきつけて現れた。そして、フランクの家を訪れるやいなや、フランクが再三止めるのも一切聞かずにふたりは写真を撮り続けたのだ。それはまるでスマートなピラニアのようだった。

僕は失礼であるとか何とかいうよりも、フランクとライアンというふたつの写真の世界が衝突する現場にいて、これ以上の興奮はなかった。写真とは瞬間瞬間、新たな倫理、新たなルールが出てきては別なものへシフトして行くことを受け入れることができ、はじめて進んでいけるものなのだと思う。礼儀知らずとか、そんな次元の話で済ませることができるようなものではない。スマートなピラニアたちのために、病気がちのフランクはぐったりし、インタビュは中断した。（その後、フランクは気を取り直し、インタビュは無事行われたのだが）、その夜、僕はあらためてライアンにもインタビュへ行っただが、そのとき彼はとても印象深い発言をした。

「きょう、ロバート・フランクに会ったとき、彼はこう言った。この写真はどこでも撮れる。って、とてもおもしろかった。実際その通りで、僕の写真を見た人にそう思っしてほしい。山、空、水、砂、ただそれだけで、場所を特定できない。ロ

バートの写真は、とても特定の。僕はそうではなくて、タイムレスな写真を撮りたい。裸の人を撮るのも、すべてが刺がされてタイムレスだから。写真はエリートピアというものを創り出すものなんだ。」

ちょうどタイミングよく、オーストリアでグループ展がスタートするところで、そのタイトルは「Americans 1940-2006」。フランクからライアンまでの展覧会というものだと彼は言った。ライアンの作品が、フリーズアートフェアなどで、どんどん高値になっていったのは、すぐ後のことだった。そしてストリート系だと思われていたライアンがついに決定的な評価を得たのが2006年、パリの「Sun And Health」であり、続いて2009年ロンドンで開催された「noomik」である。このインタビュは、この3月に「ゴッギョラリ」での個展の直前に行われたものだが、ライアンの勢いが強く感じられるものだと思う。21世紀の「時代の写真家」登場のはっきりとした姿がここにある。

展覧会の題名はいつも音楽から

2010年3月2日ニューヨークライアンのスタジオにて。ライアンのスタジオは展覧会を間近に控え、スタッフが大わらわで作業中だった。いくつかある部屋のひとつは、白ホリの小さなスタジオになっていて、僕らはそこでインタビュ

ユース。壁には今度展示されるモノクロのポートレート群がテスト用にレイアウトされていた。

ライアン・マツギンレイ（以下、ライアン） フィルムで撮ったのも、デジタルもあるんだ。だけど、デジタルはアーティフィシャルを感じさせすぎるから、ソフトボックスを使ったり、撮った写真の背景を除いたりする。それぞれのポートレートは、だいたい2、000カットくらい撮った。

後藤繁雄（以下、後藤） 今回の展覧会のタイトルはなんて言うの？

ライアン 「Everybody knows This is Nowhere」。これはニール・ヤングの歌から取ったんだ。僕の展覧会のタイトルは、いつも歌から取るんだ。このタイトルと写真は関係している。人間の背景も、色も剥ぎ取ってしまったから、どこにも存在しないような場所、どこにもない場所みたいになった。この作品シリーズは人間についてのもの、人間についての調査みたいなものかもしれない。

後藤 モデルにしている人はどんな人たちなの？

ライアン いろんな選び方があったんだけど、キャストイングの女性に協力してもらってる。彼女は世界のあちこちを旅していて、いろんな音楽フェスやアートスクールに行ったり、それだけじゃなく、ストリートでもいろんな人たちを見つけてきてくれるんだ。

後藤 選ばれている人たちには何か基準があるの？

ライアン 見た感じ、そしてスピリット、アーティストは、たいてい好きだね。だからミュージシャン、ペインター、女優、詩人、フォトグラファーとかだね。写真に撮った人たちは、アーティスト的なスピリットを持ってると思う。あとは、バンクロークなヤツとか、仕事にありつけそうにないヤツ（笑）。僕が小さいときの家族のような感じだね。僕には5人の兄弟とふたりの姉妹がいた。彼らは僕に大きな影響を与えてくれたし、お互いを思いやっていた。それぞれが違っていて、多様性がある。姉妹のひとりにはリーダーで、もうひとりにはロック系。そんな中で育った感覚に似ているね。

後藤 前は、裸のカップルたちが旅をするというものだったけれど、今度はファミリーポートレートでもあるんだよね。今度「ゴギヤラリー」での展覧会はこの新しいシリーズだけ？

ライアン これがメインショー。すべてモノクロ。あとはケイブ（洞窟）が1点、もうひとつは、女性が空中に落ちていくような写真。そして星、アストロノミーの写真だね。初めてやってみただ。後藤 天体写真？

ライアン いや、ただ35mmで撮った、とてもグレイニーなザラザラした写真。グレイニーが好きなんだ。カラーでね。あとで見せるよ。ただ空を写してる。美

しい色の空の写真。アメリカじゃあちこちで空の写真を撮ってるんだ。

後藤 「moonmilk」のときは、人間と自然の関係が、とてもスピリチュアルにとらえられていたよね？

ライアン そう。ケイブ・シリーズ（moonmilk）は、人間の身体の内側は、どんなものだと考えて始めたプロジェクトだった。僕が子供の頃、母が敬虔なカトリック信者だったから、毎日教会へ行ったし、聖書を読んできた。いちばん好きな物語は、聖ヨハネが神様を追いかけ行く話。トムゾーヤみたいに旅に出て、川や山を巡り、洞窟を探検するんだ。

スピリチュアルな経験だった

「moonmilk」の撮影

後藤 ケイブの撮影は、ずいぶん大きなプロジェクトだったみたいだね。

ライアン 本当にたくさん撮った。そしてたくさんエナジーをね。写真集の表紙（P.73）は、僕の過去の作品からいまの写真へのトランジション（移行）を表しているんだ。表紙の写真は男が飛び降りているものだけれど、他の写真は、すべて露出が2〜3分。モデルはじつとポーズをとらなくてはならない、とてもクレイジーなロングプロセスさ（笑）。洞窟の中は一日じゅう暗く、じめじめしている。道は狭い。怖いし、危険だ。だけど同時にこんなエキサイティングで新鮮な場

モデルの基準は見た感じとスピリット。アーティストは好きだね

所もない。レッドツエツペリンの音楽みたい、60年代のスーパーサチュレイテッド(彩度の強い)な感じにしたかった。

後藤 すごくスピリチュアルだね。前の裸で旅するシリーズは、あるコミュニケーション感が強かったと思う。でもケイブ・シリーズになると、自然と交わったり、人間は文明などによって汚れているわけだけれど、それを脱ぎ捨て、もう一度生まれ変わるみたいな印象を強く持つよ。浄められるとか、生まれ変わるってことを感じるね。

ライアン そうだね。あなたが言うとおりにだと思ふよ。とてもスピリチュアルな経験だった。暗い中に一日じゅういるから、セルフリフレクション(自分について考える)の時間がたくさんあった。いままでやった撮影と違って、困難な、葛藤すべきものがたくさんあった。スタッフは疲れていたけど、だれもギブアップしなかった。洞窟の中は、出口もわからないし、迷ったら死んでしまう。でもその感覚が僕にはすごくエキサイティングだったんだ(笑)。だれも、洞窟の中でセフトアップ写真なんか撮らないだろうね(笑)。無事にやり遂げられて本当に幸せだ。だから次のプロジェクトに行けるんだ。

後藤 どれくらい時間をかけたの？
ライアン ブラニンングから撮影まで入れて2年間かな。洞窟は、実はシークレフトブレイスだから、どこに洞窟があるかとか、リサーチに時間がかかった。洞

窟のコミュニティとかも調べたよ。それからルートとかね。どんな道具が必要かとか。コミュニティに入る事ができると、地下へ3〜4マイル旅ができる。だからカッターの道具にだいたい10〜12時間かかる。パトリック(助手を呼ぶ)。

上に行つて撮影の時に撮った写真を持ってきて、これを見てよ(ケイブ・シリーズ撮影のスタッフフツアアの写真をライアンがみんなで見られるようにコピーし冊子にしていた)。

後藤 すごい。メイキングブックだ。これ自体が写真集だね。楽しそうだ。本当に旅だ。

ライアン そう。15人ぐらいのクルーで行つたんだ。

後藤 「moonlink」というタイトルは、どこから来た言葉なの。神話とか、ネイティブ・アメリカンたちの言葉なのかな？
ライアン 洞窟の中に入ると、クリスタルの物質があつて、それが成長していく。洞窟にいくと、何かの拍子で見えるんだ。それが「ムーンミルク」と呼ばれているものらしい。

後藤 この写真で光っているものが？

ライアン そう。これが「ムーンミルク」。単純に美しいと思つたんだ。それでプロジェクト名を「moonlink」と呼ぶことにした。響きもポエティックだしね。洞窟に入ることで学ぶことが多かったんだ。足跡も残さず、ゴミもすべて持ち帰り、何も残さず。本当は写真も撮らずに(笑)。

これが自然に対するスピリチュアルなマナーなんだ。

後藤 自然と人間の掟だね。撮るきっかけとなったスピリチュアルな転換もあったの？

ライアン 毎年夏に、アメリカじゅうを旅するんだ。いろんなランドスケープや場所を訪れ、いろんなものに出会う。冒険、それが道を導いてくれる。洞窟に行きつめたのも偶然だったし。モデルのリーが、アイダホにある洞窟に連れて行ってくれたことがきっかけだった。それは本当にアメイジングな経験だったよ!! 頭の中に洞窟のアイディアが浮かんで、2008年にプロジェクトとしてスタートできるのに3年かかった。とにかく洞窟に行くこと以外、したいことなんて何もなかったね(笑)。

後藤 何かの声を聞いたんだね。

ライアン そうかもしれない(笑)。それで最初ムービーをつくつたんだ。僕は思いついたら、すぐ行動するタイプだし、いままでの写真も人がジャンプしたり、落下したり、走ったり、笑ったりしているとき。つまり、とてもスピードの速いものをとらえてきた。ところが、ムービーを撮ったとき、初めて「スローダウンしなくちゃ」って気がついたんだ。これまでの人生で、スローダウンなんてしたことなかった。スケートボーディング、スノーボーディングしながら育つたし、バイクに乗ったり。写真を撮りたいと思

ったのもすべて速い動きだから。でもムービーは逆で、椅子に座ってるだけでアクションがない。カメラをセットアップして、いろんなアングルを試してベストショットをみつける。モデルと相談し、ポーズを決め、背景のカラールを設定する。とても自分がテストされるプロジェクトだったんだ。自分でも、こんなことができるんだってわかってとてもよかった。だからこそ、このプロジェクトは、次のプロジェクトへ挑戦するためのいいステップになるってわかった。チャンスを捕まえるのは、リスクをとまなうこと。そして違うことに挑戦できるようになる。

ライアン 僕は多くのアーティストたちがひとつのやり方に固執して、「これが僕のスタイルだよ」と言うのがいやなんだ。僕にとっては、心地よくない。つねに違ったことに挑戦して行きたいんだ。洞窟で撮影したあとは、今度はスタジオでモノクロ写真って具合にね。

ライアン 僕は多くのアーティストたちがひとつのやり方に固執して、「これが僕のスタイルだよ」と言うのがいやなんだ。僕にとっては、心地よくない。つねに違ったことに挑戦して行きたいんだ。洞窟で撮影したあとは、今度はスタジオでモノクロ写真って具合にね。

オープンエンディングでいたい

後藤 スタイルはさまざまだけど、あなたの写真には「探求」「探求心」の強さっていろいろを感じるな。

ライアン (突然思いついたように) ねえ、ペレニス・アポットっていう尊敬している写真家がいるんだけど知ってる？

ライアン じゃあ、いよいよ新作「Everybody Knows This is Nowhere」の話しようか。今度は背景なしだね、ケイブと違って？

ライアン (突然思いついたように) ねえ、ペレニス・アポットっていう尊敬している写真家がいるんだけど知ってる？

ライアン じゃあ、いよいよ新作「Everybody Knows This is Nowhere」の話しようか。今度は背景なしだね、ケイブと違って？

ライアン じゃあ、いよいよ新作「Everybody Knows This is Nowhere」の話しようか。今度は背景なしだね、ケイブと違って？

だれも洞窟の中でセットアップ写真なんか撮らないだろう(笑)

よ(笑)。

後藤 日々のトレーニングが重要だね。

ライアン 学生の頃は、グラフィックデザインを勉強してたんだ。グラフィックデザインってコンポジションとバランスでしょ。僕はカメラのレンズをのぞくと、あんまりよく見えないようにして、ちょっとぼやけたかんじで見えるんだ。そうするとかえって、フレームの中で、形やポリウムなどのバランスがよく見えるからね。そうやって毎回やってみる。だけど同時に、「予期せぬこと」も大好きさ(笑)。被写体にパフォーマンスさせる

と何が起るかわからないでしょ。これは僕のやり方の良い部分なんだと思う。

予定していたとおりに行かなくて、サブライズがあるっていうことがね。

後藤 だけど、それは準備を完璧にすることによって、つくられる自由さという感じがする。

ライアン そうだね。準備をちゃんとする

と予期せぬことは起こりやすいから。撮影する場所に対して注意すること。目の端から端までね。僕の弟は軍隊のシークレットサービスにいるんだけど、部屋に入るとレストランだって壁やバックをチェックするよ。どんな部屋であれ、すべて見て知ろうとする。どんなことが起こっても大丈夫なように。

後藤 このモノクロポートレイトを見ると、あなたが被写体に対して、緊張を与え、そしてリリースしていることがよくわか

る。ある緊張の持続が、逆にグッドバイレーションなエネルギーを出させる。

ライアン ポエティックなコメントを見つけてようとしているのかもしれない。自然の色は、あなたがいま、何を見ているかを反映する。でも白黒はちょっと違う。すべてを除き、人物中心になる。撮影のときは、僕がアクティングの指示を伝える。例えば「ジェラシーを表現して」

とか。だから、結局、その人自身と僕のミックスなんだよね。その人自身にやってもらいたいこともあるし、ほとんどのモデルたちは、長い場合は一カ月ぐらい時間をすごすよ。そうやってよく知ることができる。そして撮影は1〜2時間ぐらいかける。この壁に這っている人たちは、撮影は2時間ぐらいかけたけど、撮影後1回も話さない人もいる。多様なんだ。2年くらいかけて撮って、90人ぐらい写真集に載せることができた。被写体は、東京、ロンドン、パリ、オーストラリア、ブラジル、アメリカ。世界中のいろんな人たちが入っている。

後藤 撮り方は、それぞれの人によってすべて違っているのがおもしろいね。このプロジェクトは今後も続けていくの？

ライアン いまはいったんブレイク中だね。今後続けるかどうかいまはわからない。いままで同時にやってきたいくつものプロジェクトが終了するタイミングなんだけど、じゃあ次は？(笑)さあね。僕はたくさん撮るし、それをやりながら、

ひとつの大きなプロジェクトをやるのが、自分にとってやりやすい。いまはブレイクだから、本をたくさん読んだり、映画を見たり、ノートをとったり、写真集を見たり、デジカメでインスタアされたものを撮ったりね。

後藤 本にじっとしていないね(笑)。ファッションニューティングやコマースも面白いよ。やっているようにだけど？

ライアン 動くのが大好きだからね(笑)。自分の仕事を愛しているよ。一日中、コマースのプロジェクトは予算が使えないし、実験的なことにも挑戦できる。いまやっているのは、「PRINGLE OF SCOTLAND」っていうブランドの広告

とか。この仕事はとってもよくて、仕事の中に多様性があるんだ。コマースの仕事は多くの人が見てくれるしね。ビルボード、雑誌、YouTube。いろんなメディアを使うのは楽しいし、重要なことだと思う。アートのコミュニティは狭いから、コマースを通して、自分の作品がいろんな人に届くのはいいことだよ。

後藤 この展覧会は巡回するの？

ライアン NYだけ。いや、サンフランシスコで11月にやるかも。日本のミュージアムでできた最高なだけだよ。

後藤 タイム・パーバーがショーをやったとき、一度来たよね。

ライアン 3年ぐらい前かな。東京は1回しか行ったことないから、また行きたいって思っているんだ。

動くのが大好きだ。自分の仕事を愛しているよ、一日中

ヒストリー・オブ・ライアン・マッギンレイ

The History of Ryan McGinley

ライアン・マッギンレイは、まちがいなく現在もっとも力のある写真家のひとりだ。

才能・実力・キャリア・知名度、どれをとっても申し分ない。

彼はどこで生まれて、どのような青春を送りながら、スターダムを駆け上がったのか。

1990年代から現在に至る、ライアンの経歴を追う。

構成・文＝伊東豊子（英国在住美術ジャーナリスト）

写真とアートの境界に立つ

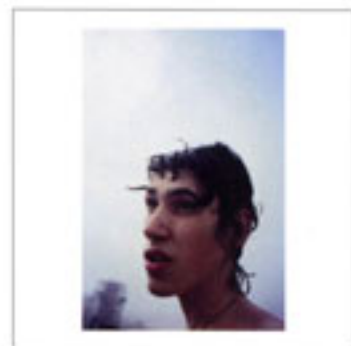
ライアン・マッギンレイほど話題性のある写真家は、世界広しといえどそうはいないだろう。2009年9月に1,000部限定で発売された写真集『Moonmilk』の初版が発売と同時に完売、その熱も覚めやらぬうちに2010年バンクーバー冬季五輪のスチル写真を手がけ、女子モーグルのハナ・カリーニーや男子フィギュアのエヴァン・ライサチェクらメダリストたちを従来のスポーツ写真とは無縁の詩的なスタイルで撮った写真が、『ニューヨークタイムズマガジン』誌上で発表されて大評判になった。さらに、2010年3月にNYの『ゴゴキヤラリー』で、それまでの作風から180度方向転換したモノクロのポートレートシリーズ『Everybody Knows This Is Nowhere』を発表（P101、下段3点）。さらに、同5月には、イギリスの売れっ子ミュージシャンM.I.A.を、『ニューヨークタイムズマガジン』のために再撮影し、そのアクション映画ばりの撮影風景がYouTubeで公開されて、注目を集めた。

ライアンの作品というと、自然の中で裸になって戯れる友人たちをスナップ

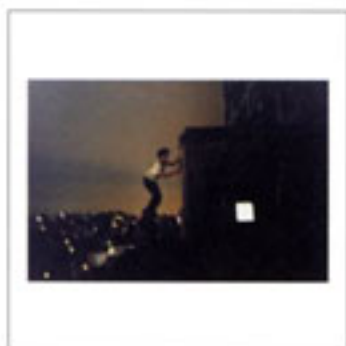
ブッシュット風に撮ったカジュアルなものが多かったが、新しいプロジェクトはこれまでと大きく異なる。多くは多数の撮影クルーを率いた大がかりなもので、被写体もスポーツ選手や音楽家から一般人まで幅広い。その活動領域の広がりには、32歳にして早くも次のキャリアとなるステージに突入した印象がある。

種は幼少期にまかれた

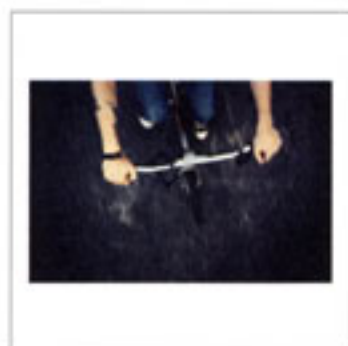
ライアンは1977年、ニュー・ジャージー州ラムジーで生まれた。8人兄弟の末っ子で、子どものころからスポーツ万能のヤンチャな少年だったようだ。父はそんな彼をテニスの選手しかかったが、典型的な都会っ子だった当人は、12〜3歳のころから、ティーンエイジャーの間で、「クルール」の代名詞になっていたスケートボードに夢中になり、学校が終わるとマンハッタン近郊のワシントン・スクウェア・パークに繰り出し、日が暮れると彼らの溜まり場になっていたアスター・プレイスを流れるような毎日、仲間のプレイを録画するために、15歳のときに初めてデジタルビデオ・カメラを購入しているが、普通のカメラでないところに早く



Enc. 2001



Dash Bombing, 2000



BMX, 2000

もの中の映像への関心がうかがわれる。スケートボードを通じ、ライアンは多くのクリエイターたちと出会っていくことになる。なかでも、のちに彼に大きな影響を与えることになる写真家・ラリー・クラークとの出会いは重要だ。70年代、写真集『タルサ』で有名なラリー・クラークは、映画『Kids』の撮影のために当時スケーターと行動を共にしていた。この映画がライアンの『Kids Are Alright』の起点になっているのは言うまでもなく、ユース・カルチャーやセクシュアリティへのこだわりなど、クラークの関心事がそのままライアンのそれへと発展している。また、セクシュアリティにおいては、1994年にAIDSで亡くなった兄・マイケルの存在も大きく、ドラッグ・クイーンだった兄の華やかなライフと壮絶な闘病生活が、多感な思春期にあったライアンの世界観に大きな影響を与えたであろうことは想像に難くない。

運命を変えた 『Kids Are Alright』

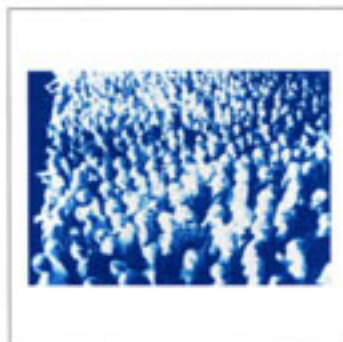
NYの美大、パーソンズ・スクール・オブ・デザインのデザイン科に進学す

ることになったライアンは、高校卒業後、マンハッタン南部のグリニッジ・ヴィレッジに移り住む。この界隈は、ビート・ムーブメント（ビートニク）や同性愛運動の発祥地として知られ、歴史的にクリエイターとの関係が濃いボヘミアンな地域。ライアンが同郷の友人、ダン・コーレンとシェアをしていたアパートメントも例外にもれず、ドラッグありセックスあり出入り自由のパーティーアニマルの集へと変ぼう。2009年に麻薬中毒で夭逝した美術家ダッシュ・スノウをはじめここで出会ったメンバーが、写真に没頭し始めた彼の格好の被写体となっていく。アパートを訪れた友人をボラロイドカメラで撮り、日付と名前を書いて壁に貼るのが日課となり、5年後には部屋の壁が写真でびっしり埋まるというアン・デイ・ウォーホル顔負けのエピソードが残っている。

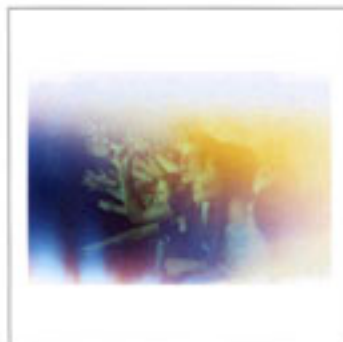
そんなライアンが周囲に認知されるきっかけとなったのが、2000年に420ウエスト・ブロードウェイで開いた個展『Kids Are Alright』。同時出版された同名写真集『ザ・フーのドキュメンタリー映画から題名を借りたこの作品は（P98下段3点）、ほのかにプロの香りが漂う自主プロジェクト

で、プリント約20点を披露した展示は、ライアンの知人の父親がたまたま持っていた改装直前の空きビルを借りて行われた。写真集は、フィルムスキヤナで読み込んだデータを自宅のプリンタで出力して綴じた私家版。また、展覧会の開催には、故ロバート・メイブルソープ（写真家、1989年AIDSで没）のパートナーだったジャック・ウォールズがかかわっているなど、すでにこの時点で相当な人脈と戦略を持ち合わせていたことがうかがわれる。ライアンのこうした周到な根回しは、写真集の使い方にも表れている。会場で売れ残った『Kids Are Alright』を著名なギャラリイや雑誌社はもちろん、ラリー・クラークやナン・ゴールドフィン、ヴォルフガング・ティルマンスなど自分が敬愛する作家にも送っているのだ。

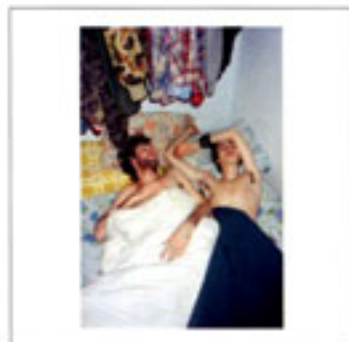
作戦が功を奏したのか、売れっ子写真家の起用で有名なファッション雑誌『INDEX』から撮影の依頼が入り、これを皮切りに他誌からも続々依頼が入る。そして2年後には、『INDEX』から写真集『Ryan McGinley』が出版される。また、『ホイットニー美術館』で史上最年少の25歳で個展を開くことになった。そのスマートな容姿、華やかなスポンサーと友人関係がメディアの



morrissey 30, 2004



morrissey 16, 2006



Dan & Eric, 2001

関心をあおり、さらに評論家からはラリー・クラークやナン・ゴールドインとは異なる視点で撮られたユースカルチャーとカメラ慣れした被写体の現代性が指摘され、この時点ですでに「次世代の作家」としてもはやされるようになる。2003年、写真雑誌「アメリカンフォトマガジン」の「フォトグラファー・オブ・ザ・イヤー」に選ばれ、翌2004年にはNYのP.S.1で個展を開催。同年、「ニューヨークタイムズマガジン」からアテナ五輪の米国代表競泳選手の撮影を依頼され、この作品がビューリッツァー賞にノミネートされるなど、トップアーティストに仲間入りした。

ロードトリップに魅せられて

最初の成功の波が過ぎたころ、ライアンの活動にふたつの側面が加わる。ひとつが、ジャック・ケルアックの小説「路上」やデニス・ホッパーらの映画「イージー・ライダー」などに触発されたロードトリップ。もうひとつが、少年時代からの大ファン、モリッシーのコンサート撮影。雄大なランドスケープと、熱気に包まれた都会のコンサートホール。自然光を浴びる友人たち

と、人工灯に照らされたオーディエンス。この対照的なふたつのプロジェクトから、ラリー・クラークやナン・ゴールドインの影を払拭したライアン独自の世界が生まれていく。

特に重要なのが前者のロードトリップで、彼の代表作が多数このプロジェクトから生まれる（作品ページP46〜47など）。ライアンのロードトリップは、毎年夏に2〜3カ月、10人程度の同行者という大所帯で決行されていた。そこでは、裸の男女が草原を駆け回ったり、海に飛び込むといった身体の動きとネイチャーとの融合が強調される。若さと希望、自由と開放感に満ちている。被写体のあまりに自然な雰囲気、気ままな旅行の合間に撮られたスナップ写真のような印象を受けるが、それは大きな誤解だ。ロードトリップの目的はあくまでも撮影で、モデルたちには日当が支払われていて、食事や旅費などの経費もすべてライアン持ち。1回のロードトリップには、10万ドルほどの予算がかけられているそうだ。

撮影方法も、一見純粋なドキュメンタリー撮影のように見えて、初期のころとは違ってディレクションが介在している。もちろん、映画のディレクションとは異なり、環境と設定を決めて

大まかな指示を出して、あとは偶然に委ねるといふもの。「バンジージャンプやトランポリン、花火などの「お遊び」は撮影のために企画され、気に入った一枚が撮れるまで何時間も繰り返される。この半演出性が、ロバート・フランクやステイブ・ショアなどのロードトリップの先人たちと違う点だ。

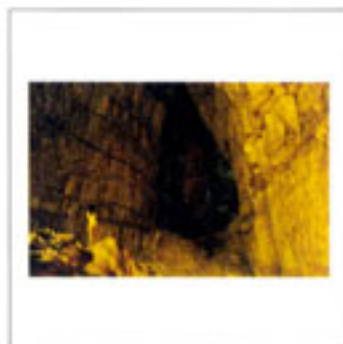
モリッシーを追いかけて

もうひとつの大きなプロジェクト、モリッシーのコンサート撮影は、当初カメラを2台（コンタックスT4）を下着に隠して会場に持ち込んでこっそり撮影していた。だが、そうやって撮った写真を本にまとめてモリッシーのマネージャーに見せたところ、偶然、そのマネージャーがライアンの作品のコレクターだったことから、とんとん拍子に話が進んで、モリッシー自身から無制限の撮影許可が下りる。2004年以降、約3年間で世界各地の100〜200カ所のライブコンサート会場を訪れて撮影し、2007年にNYのTeenギャラリーで個展「Teenage Regulars」を開催した。

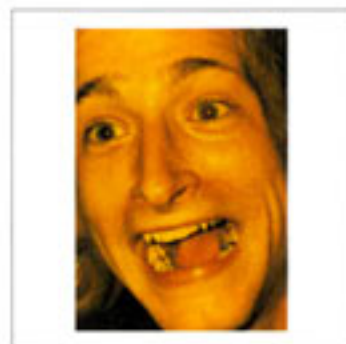
作品の被写体は、モリッシーというよりもむしろライブの観客で、ありき



India (Gypsum Burst), 2008



Grace & Tracy (Golath), 2009



momissey 1, 2004

たりには絶対撮らないライアンのこだわりがここでも見られた（P99下段2点、P100下段右）。当時、話題になったのは、まるでカラーセロファンをかぶせたような鮮やかな色だ。その正体は会場の照明だが、ライアンはさらにミステリーを加えるため、フィルムをあらかじめ朝日や夕日、タングステン光やテレビ画面の光線で露光しておき、それを撮影に使用した。この作品で、2007年のニューヨーク国際写真センターのヤング・フォトグラフィア賞を受賞している。

大作「Moonilk」を制作

ライアンがこの時点でのすべてのキャリアを注ぎ込んだのが、2009年9月にロンドンのアリソン・ジャック・ギャラリーで公開された「Moonilk」シリーズだ。撮影は2008〜9年の夏に約20名のスタッフを率いて、北米各地の未開の洞窟37カ所を回って行われた。観光地化した公開済みの洞窟ではスリド撮影の許可が下りにくいのではないかと、という懸念から未開の洞窟を選んだようだが、結果としてロケ地にたどり着くまでの行程が、映画「大脱走」的なアドベンチャーでかなりた

いへんだったようだ。撮影はこれまでの決定的瞬間をとらえるものから、複雑なライティングシステムを組んでじっくりつくり込む手法に変わった。鍾乳洞という閉ざされた空間、深遠をのぞき込む構図、デレク・ジャーマンの映画のようなシニールな色合いなど、彼の視点がこれまでの身体性から内面世界へ移ったような印象を受ける。

ゼロ年代を代表する作家

「Moonilk」のあと、バンクーバー冬季五輪の撮影やショートフィルムの公開など多岐にわたる活動が目立つライアンだが、10年の活動を通じて感心するのが、その行動的で柔軟な制作姿勢だ。写真に映像、プリントに写真集、自主制作にアサインメント、数々のロードトリップの実行に、コンサート・スポーツ・セレブの撮影、さらには夜な夜なのパーティー通いと、20代の盛りを差し引いてもそのエネルギーには圧倒される。

ライアンは、よくアーティスト仲間やダッシュ・スノウやダン・コーレンなどゼロ年代に台頭したNYの美術家とひとくくりにされることがあるが、写真というカテゴリで引き合いに出さ

れるのはナン・ゴールドインやラリー・クラークといった二世代前か、あるいはティルマンズやサム・テイラーウッッドなどの一世代前の作家が多く、同世代の中では浮いている印象がある。

興味のアリアでもっとも近くにいるのはティルマンズかもしれないが、抽象表現に移行して大衆性が薄まった最近のティルマンズではなく、ユースカルチャーの代弁者として評価されていた時代のティルマンズだろう。あのスピリットを引き継いで、ゼロ年代を通じて写真とサブカルチャーの境界線上を一直線に駆け抜けてきたのがライアンではないだろうか。

いわゆる、アートフォトグラフィアーの多くが、写真とアートの間にある抽象的な壁を意識しすぎて、アートでなくなることを恐れるあまり活動を制限して、写真の最大の強みである大衆とのコミュニケーションを犠牲にしているが、ライアンはそのアートの呪縛から解放されているという特異な立ち位置にある。写真家にとってこれほど大きな強みはない。しかも、まだ32歳でキャリアの第二段階に入ったばかり、さらなる境界線をぶち破る時間と力は、まだまだたっぷりありそうだ。先が楽しみでたまらない。



Owl, 2010



Helena, 2010



Tobias, 2010